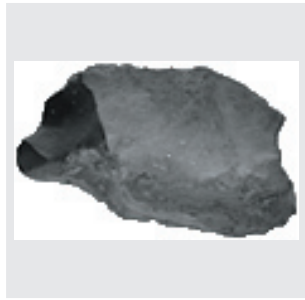


●コレクション・データ

時代：弥生時代 中期  
調査：唐古・鍵遺跡 第37次調査  
発見年：1987年  
大きさ：最大長25.9cm 重量3.950g  
展示位置：第2室・「石を割る」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 20

唐古・鍵に運ばれたサヌカイト原石

私たちが使っている鋏やナイフは、ステンレスやセラミック製ですが、弥生時代では物を切るのにサヌカイト製の石匙などが使われました。

このサヌカイトの原石は、表面が風化しており灰白色ですが、割ると中は黒色で、貝殻状に鋭く割れる特徴をもち、ノートや新聞紙などを簡単に切ることができます。

サヌカイト（和名：讃岐岩）は、ガラス質・無斑・晶質の安山岩で、1891年にドイツ人の地質学者・ヴァインシエンクによって、産地の香川県にちなみ命名されました。叩くと高い金属音が響くことから、「カンカン石」として親しまれています。

類似した岩石は、九州から愛知県まで分布しており、特に、二上山（奈良県・大阪府）・五色台（香川県）・冠高原（広島県）で産出するサヌカイトは、約3万年前の旧石器時代から打製石器の素材として使われまし

た。

弥生時代の唐古・鍵遺跡でも、10キロ離れた二上山のサヌカイトを使って石鋏や石剣などを多量に作っていました。また、唐古池南側堤防の調査では、重さ約10キロの人頭大のサヌカイト原石が6個集積された状態で見つかっています。この原石の一端には打ち割られた所があり、サヌカイトの品質を確かめたのでしよう。

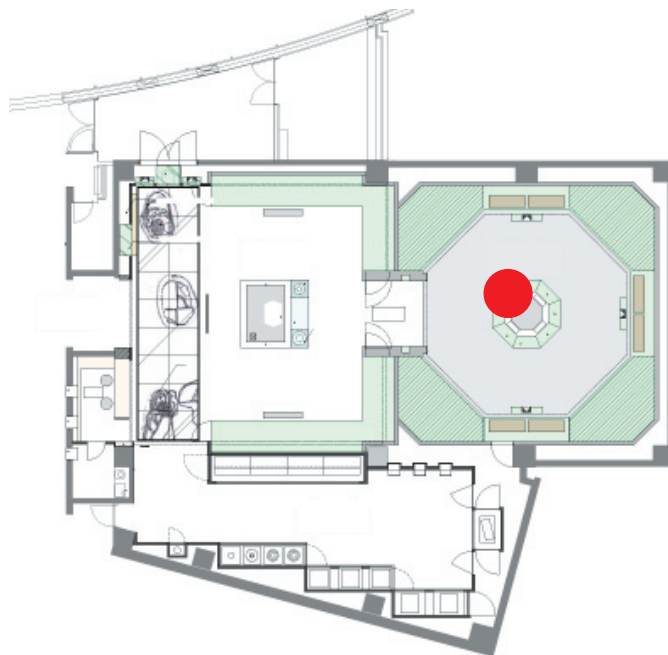
このことから唐古・鍵の人々は、打製石器の素材として二上山のサヌカイト原石を多量に入手していたと考えられます。

これに対して、唐古・鍵遺跡の周辺遺跡では、原石や製作途中品、石屑の出土が少なく、唐古・鍵ムラで作られた石器が配られていたことを知ることができます。

このようにサヌカイトの道を追跡することは、当時の流通やネットワークの解明につながるのです。

唐古・鍵考古学  
ミュージアム  
【 ☎ 34・7100】

開館時間 午前9時～午後5時（月曜は休館）  
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）  
▼大人 2000円（1500円）  
▼高校生・大学生 1000円（500円）



ミュージアム上面図と展示位置